

第5回 教育課程編成委員会 議事録

〔日 時〕 2017年11月14日（火）16：25～17：05

〔場 所〕 厚木看護専門学校

〔出席者〕

【委員】

厚木病院協会副会長、厚木市市民健康部長、県看護協会県央支部理事、実習病院看護部門代表（秦野赤十字病院看護部長）、実習病院看護部門代表（東名厚木病院副院長）、学校長、副学校長、看護第一学科長、看護第二学科長、学校総務課長

<学校長・挨拶>

学生確保が年々厳しくなっている現状で、いかに魅力ある学校にしていけるかということに関して、カリキュラムを充実させていくことは、とても重要であると考えております。前の会議でご意見をいただいた中で、私もそうだなと思ったご意見として、PR する中で、うちの学校は何が強みなのか、これだけは卒業したら獲得できますよ、というようなものをもっともっと強く言っていけないと、これから人を集めていけないな、という本当に危機感を感じております。学校の根底となる理念、目的等の土台となるものは変えられないと思います。時代が変遷する中、教育目標、卒業時に期待する能力等は見直していく必要があります。どういった人材を育てていくのかということ、今回ご意見をいただいて、反映させていきたいと考えておりますので、どうぞ忌憚のないご意見をよろしくお願いいたします。

<委員長>

議題の1「カリキュラムの改正を見据えた「教育目標」「卒業時に期待する能力」の再検討」について、皆様からご意見、ご質問をいただきたいと思っております。事前にお配りした資料にテーマの主旨を書かせていただいております。これは教育の礎ともなるカリキュラム構築の土台になると考えておりますので、これで十分なのか、足りないものは何なのかという視点からキーワード等をいただけたらと思っておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

<A 委員>

最近の若い人の傾向として、打たれ弱いという印象がすごくあります。例えばインシデントを起こした、注意をされる、そうすると自分の中で処理しきれなくなり、解決できないまま引きずっていくとすることがあり、中々適応がしにくくなっている、という実感がとてもあります。看護学校の教育の中で、卒業時に期待する能力の6番目に「人間関係を発展させる基礎的能力を身につける」と書かれております。具体的にコミュニケーション技法というか、自分の気持ちを表現する、おそらく幼少の頃から育つものだと思いますが、社会に出たときにそれが手立てとなるような教育が意識されているのでしょうか。

<委員長>

カリキュラム中でどれかと言われると難しいところもありますが、指導の中で随時行っています。どうでしょうか。

<B 委員>

カリキュラムの中では、人間関係論Ⅰという宿泊研修を入学時に、3年次にも人間関係論Ⅱ、これも宿泊研修ですが、「自分を知る、他者を知る」という科目が設けられています。あとは精神看護学、心理学等カリキュラム上は設定されております。ただ

し、授業を受けたからコミュニケーションができるようになるかという点と別です。やはり日々の隠されたカリキュラムとでも言うような私たち教員の指導だと思います。卒業時に期待する能力の6番目については、特に重要視しているところでもあります。今どきの若者、特に18歳の現役で入学してきた学生に対して、今までの当校のやり方が通用しているのかを考えたときに、最初はお客様状態で入学してくるが、それをどうやって3年間かけてお客様にサービスを提供する主体者として、意識を変革させていくかということを経験しているところではあります。

<C 委員>

二科の方過去に8人退学が出ています。退学者が増えた理由として、メンタル面がありました。その振り返りとして、授業でコミュニケーションを強めていこうと、心理学の先生にコミュニケーション面を増やしてもらい、論理学の先生には論理的かつ知的に考えられるように等、内容を深めました。あとは社会人基礎力、パーソナルポートフォリオなど、反省ではなく、目標を持って、自分の人間力をみがくことを進めております。二科の学生さんは、実習時にあまり休まないことが自慢だったのですが、去年はかなり休んだりしました。私たちも打たれ強く、自己否定ではなく、自分を認めながら、自分を大切にしてもらいたい、と考えながら、それをカリキュラムの中にどういう形で組み込めばいいのかを試行錯誤しているところではあります。

<D 委員>

物事をとらえる時、言われた時に、もう少し柔軟性があるといいのかなって思います。例えば、「こちらの人はこう考えて、別な人は違う考えを」ということです。「必ずこうでなければならない」というガチガチなところがあります。こう言われてしまったら「私はもうダメだ」となってしまう。もう少し柔軟に物事を考えられたり、捉えられたりすると楽なのではないかと思えます。一生懸命なのはすごく評価できますが、何か起きたときに「自分はダメだ」みたいな感じにならない、そういった柔軟性が身につけば、もう少し生きやすくなるのではないかと思えます。

<委員長>

講師会議等でもいろいろとそういった意見をいただいている、何か指導を受けると、否定されたら受け取ってしまい、傷ついてしまう。言われるということに対して、慣れていないというのか、体験が少ないということもあって、客観的に物事を捉えてほしいのですが、好き嫌いという感情レベルで捉えがちです。それが18歳だけではなく、大人の人達にも十分あります。二科は「メタ認知」等も評価表に入れて、検討をしています。これを取り入れたからといって、すぐにできるのかという点と現実には厳しいです。

<副委員長>

教員が学生を対象に研究をしまして、これから学会で発表予定ですが、学生達の自己受容が最も低い値が出ています。自分を認めることができない。これは教育学の講師の先生からも毎年、特徴として言われています。当校へ入学する学生が、特別に自己受容が低いというわけではないと考えていますが、全体的に自分のことが好きではない、自分のことを認められない、という学生さん達の土台があります。認められているのに「私はダメだ」と思っている、「相手も（私を）ダメだと思っている」「だから私は全部ダメだ」と思っている、元々根本に持っているもの、非常に自己尊厳の低さというものに対して、先ほど発言がありました「うちの今の教育が若者に合っているのか」ということについては、割とうちの学校は厳しく、きちんとやらせる教育スタンスです。それは自己受容度が非常に低い学生達に、さらに「君たちはやらなきゃダメなのだよ」ということを被せる教育でもあります。そうしたときに「これでいいのか」とちょっと悩みます。けれども、ほめてほめてというだけでは、先ほどの発言のように、打たれ強さも備わっていないので、バランス的にもす

ごく難しいとを考えます。今年、精神看護学を担当する機会がありまして、レジリエンスいわゆる心の回復力というところでは、「何故人が悪意を感じるのか」「何故いじめられていると思うのか」「どうして差別を受けていると思うのか」等、心の動きのようなものを教授する機会がありました。そのような授業はすごく興味がなくて、ノートの取り方も真剣でした。学生も自分達で実感していて、何とかしたいのだろうな、と感じる部分もありました。

<D 委員>

卒業生が出身校に向けてお手紙を書く機会を当院は設けています。その中で書かれている内容として、「卒業して先生たちから言われたことがようやくわかりました、在校生のみなさん一生懸命勉強してください」というようなメッセージがかなり多くあります。当院は厚木看護専門学校の学生さんを受け入れてきておりますが、すごく学校で厳しくされているというのは、他の学校を卒業してきた人たちと比べてそこは評価できる、というところが有るのですけれども、先ほど言われました自分を認められないという人はやっぱり居ます。4~5人で病棟に配属されたときに、メンタル的に落ちて、遅れをとっていると「私はやっぱりダメだ」「できているところがこんなにあるのだよ」と言ってあげても、「ダメなのです」となる。中々職場に出てきなくなります。そこで職場側のサポートとして、配置を変えて頑張ってもらおうようなことをしております。自分を認められない人に関しては、大変だと感じております。最近はその人が、多くなっています。

<E 委員>

「できているよ」と言うのと「いやいやそんなことない」と返ってきます。謙虚だなと思う反面、謙虚ではなくて自分を認められないという部分があるのだと思います。「卒業時に期待する能力」に書かれている項目についてですが、どこの看護学校でも一般的に身につけてほしい項目だと感じましたが、厚木看護専門学校に入学しますと卒業時にこういったことが身につきますよ、といったことを挙げた方がいいのではないかと感じました。

<委員長>

今回、テーマに挙げてみて、他校のものを見てみると、結構具体的に示している学校もありました。「優しさ」とか「正確な判断」とか、書いている学校もありました。他には「卒業直後から指導助言を基に看護ケアができる人材」とか、**そこ**まで書いている学校もありました。「優しさ」や「正確な判断」よりわかりやすいと感じましたが。

<E 委員>

提出物とかしっかりしている。実習を受け入れている時から感じておりますが、きちんとしているので、一社会人としてのルールが当たり前のように、できるところが厚木看護さんの教育のすごいところだと思うので、そういうことを卒業時に身に付くこととして言った方がいいと思います。

<D 委員>

社会人としてあいさつ、提出物、休まないとか、厚木看護の卒業生はしっかりしていて、大事なことだと思います。そういうことも表現しても、いいかと思えます。

<E 委員>

「期待する能力」というより、「身に付く能力」とか言い換えても。

<副委員長>

先ほど言われた「打たれ強さ」とかを言語を変えて「心が強くなる」というように載せてもいいですね。

<A 委員>

正直な話として、今時の看護学校では、現場で使える技術はほぼ無い状況です。現場は応用ですし、学校で注射や採血をするわけではないので、そこを一番に持ってく

るより、私は社会人として、初めて社会人として出る人がほとんどであることを踏まえて、社会人として恥ずかしくない人を育てるということを、上位に挙げても良いかと思います。技術は現場で教えていくことだと思いますので、そこはあまり求めていません。もちろん身に付いていることに越したことは無いですが、今のカリキュラムの中では難しいので、それよりは自分で学習する姿勢みたいなものを身に付けてほしいと思います。

<委員長>

「学習の継続性を認識し努力できる」と掲げてはいますが、表現が平易かも知れません。

<E 委員>

これは卒業生に限らず現役生にも当てはまることなので、もう少し具体的にした方がいいと思います。

<E 委員>

人間関係のところをしっかりと言う。「他者も認め、自己も認めることができる」とそういった形に具体的に表現した方が、ここの学校の教育理念や目標とかだけでなく、募集にも使えると思います。

<委員長>

現場として求められるものを出していただきました。他にもまだありますか。

<A 委員>

あとは、コミュニケーションの一環として、報告・連絡・相談ができないということが、うちの新人たちの課題です。ここだけ頑張んなさいと言っているのですが、できないですね。看護学校でそれを教えることは難しいと思うのですが、思ったことを表現するという習慣を身に付けてもらわないといけない。現場で飲み込んでしまわずに、聞ける人には聞けるという、まずはそういう逃げ道があっても、いいと思いますが、抱え込んでしまいます。

<E 委員>

うちでも、新人が先輩に言えずに同様なことが起きています。やっぱり自分で抱え込んでしまいます。自分の思いを人に伝えるということは、恥ずかしいことでも何でもないということが、わかってないのかと思います。

<A 委員>

不器用なのだと思います。思っていることはたくさんあるのに、リーダーには言えなくても、一つ上の先輩にだったら言えるみたいな器用さというか逃げ道を、自分で作れないものなのか、ということを感じたりしています。

<D 委員>

たまたま、厚書の卒業生で1年目の看護師が、ヒヤリ・ハットを防いだという理由で、グッドジョブ賞をもらいました。今は、薬がシートに入っていてなくて、包装されてしまいます。それをいつもと違う薬が入っているということに新人が気づき、声を出して先輩に「これ違います」と言いました。薬剤部の誤調剤でした。出さなくてもいい薬でしたが、それを気づくことができました。自分が「あれ、おかしいな」というときに声を出す、そして先輩に報告する、ということができるのは、現場にとって大事なことです。そういう力を身に付けていただきたい。もし、間違ったとしても「あれっ」と感じたことを言葉に出して表現する力というのは大事です。

<委員長>

臨床側からあふれるようにご意見をいただきました。本当にそうだなと感じております。F先生、一般的な社会ではどうなのか、ご意見をお願いします。

<F 委員>

今の子はすごく弱い、能力はあるのに応用力が無いです。自分の新たな職場の仕事、

そんなに難しくないものですが、例えば窓口は嫌だ、電話対応が嫌だとか、そういう人が多く、メンタルも相応に弱いです。自分が思った事を言えるような勉強も必要です。何でもかんでも言えばいいということではないと思いますが、やはり発言する能力というものをカリキュラムの中に取り入れるとか、みんなの前で発言してみるとか、こうしたことを経験して、恥ずかしくても経験を積んでいるうちに慣れてくるものです。社会人になれば、そういうことも多くなりますので、看護だけではなくて普通の社会も同じだと思います。発言する機会を取り入れていくことも必要なのかな、今まで研修では、講師の人から聞いているだけでしたが、これはすぐの中で話し合ってくださいとか、そういう研修も多くなっています。そういう研修の中で、自分の考えを言える能力が出てくると、自分が勉強したものを活かせることになると思います。今後そうした内容をカリキュラムに入れて、自己の発言をする、そして精神的にも強くなっていく。まじめ過ぎてしまうと、飲み込んでしまう、我慢してしまう、精神的にまいってしまうことが多いから、何でもいいから、みんなで話し合おうよ、発言しようよ、という部分があると、完全とは言わないまでもいいのでは、と考えます。

<委員長>

看護職自身が生真面目なところがあり、中々硬いところもあります。いろいろと表現力、プレゼンテーション力、発信力等を取り入れてはいますが、決まった人ばかりが発言する傾向があります。

<B委員>

夜の8時過ぎに駅前を歩きますと、塾が林立しておりますから、小・中学生のお子さんが塾を終え、お母さんが車で迎えに来てという場面に遭遇します。お子さんを真ん中に挟んで、塾の先生がお子さんのことを話し始める、それを親が返す。お子さん本人は気持ちを表現しないで、大人が代弁してしまうというのが、如実に見えます。そういう中では、自分自身を表現するとか、他者に知ってもらうとかが鍛えられません。そういう機会を大人が奪っているんだろうなというのが、根が不器用というよりかは、結果的に鍛えられずにきてしまった。入学してみると、悩んでいる学生の悩みというと、学業がついていけないとか、経済的なこととかではなく、クラスメイトとしゃべれないとか悩みとして出てきたりします。教員側は自分を表現するよう日々きちんと指導しています。本当の意味で、何でも話していいという機会ではなくて、看護学生として何を話すべきなのかという圧力がかかり、安心して自分を表現できる環境の確保も必要なのかな、と思いながら、片やそう言ってはられない。3年間というリミットもありますので、鍛えていかななくてはいけない。学生が安心するということ、職業人として鍛えていくこと、このメリハリをどのようにつけていけばいいのか、ご意見をいただき考えているところです。

<E委員>

学校側がカリキュラムとか日々の教育の中で鍛えるということもしているでしょうけど、現場に来たとき、受け入れられる環境にしておかないと、せっかくの教育も無駄となってしまいます。意向調査で「自分の意見をちゃんと伝えることができているですか」と毎年聞いています。大河原先生のお話から、要所は教育できているものと感じました。臨床での受入れのところも同じように考えていかないと、学校だけが頑張っても、うまくいかないこともあると思いました。

<委員長>

臨床現場では、患者さんに発信しなければならないことすごく多いです。説明して、理解していただくという場面が、すごく多いと思ったのですが、そういう力がついているのかなど。学生は、卒業時に十分ではないと思いますが、そういう素地を作らないと、きちんと患者さんに説明をして、ご理解をいただき、発信する能力を高めないと、厳しいなと現場では感じていました。

<副委員長>

私は専任教員だったときに、厚木看護専門学校の教育は誇りでもありました。病棟科長として臨床に戻ったとき、厚木看護と他の看護学校2校を病棟で受けることになりました。カンファレンスに出ると、他校の学生さんは自由な意見、大変活発でした。厚木看護は、どちらかというシーンとして、先生に向って話していて、その構図を見たときに、すごくショックを受けました。自由な発言をしている学校の学生さんは理屈に合っていないとも言います、何それってというようなとも言います。学生同士のやり取りでも、「違うんじゃない」「変なこと」と言われたりもしながら、物凄くアクティブなディスカッションがされたときに、褒められる体験もしています。うちの看護学生に足りないもの、他の看護学校の学生さんと比べて、こんな能力が何で厚木看護の学生には付いてこないんだろう、ということをごぜひ教えていただけたらと思います。

<A 委員>

実習時にカンファレンスをいっぱいします。その時に発表はするのですが、それに対するディスカッションが中々進みません。順番に発表を始めますが、ほぼ順番に言って終わる、もう少しそれに対して意見を言う、つまりカンファレンスになっていません。発表会で終わっている感じがします。おそらくそこに指導者も入っているので、その形式をお互いに変えていかないとはいけません、指導者もただそれを見守るのでなくて、一緒にディスカッションする、教員と指導者と学生と、指導者もお手本になる位、意見を言うとか、ファシリテーターみたいな役割をしたらいいのかな、と大河原先生の話も聞いて、やっぱり臨床のあり方も考えてはいかないと。

<副委員長>

指導者も居て、科長も居ます。同じ環境なのに、あれだけカンファレンスが違うって。それが知的なもののカンファレンスではありません。大学とか他校の知的な部分でというのなら理解できますけど、本当に自由で素直な意見をディスカッションしています。時間が足りない、私たちからも意見を言いたいけど、話すような時間も無い位、活発です。うちのカンファレンスは違います。話をしているも順番でとか。学校ではグループワークをたくさんやっています。学生が嫌がる位やっています。けれども、それがディスカッションにつながっていかない、そこで自分が思っていることを伝える、考えていることを相手に伝えるという能力、発言力、報告・連絡・相談等にもきっと通じていきます。この不自由な感じは何なのか、と思いました。

<E 委員>

グループワークをやり、そのディスカッションにおいて、自分が意見を言うことが自分にプラスになる、そういう実感を学校のグループワークで持つこと、また他の人が意見を言うことで自分も知識が深まる、カンファレンスがそういうものなのということを実感していれば、現場に行った時も、現場の実習指導者の進め方にもよるかも知れませんが、カンファレンスの中で責められるだけだと感じてしまいますと、意見を言わなくなると思います。

<D 委員>

私は最近カンファレンスに入っていないませんが、何年か前に入った時、確かに学校を比較すると、厚看の方がきちんと発表をするというようなカンファレンスを行っていました。他校は、学力的には厚木看護の方が国試合格率も高いので、明らかにずれたとも言っています。わいわいガヤガヤと好きなことを言っていました。学校の比較はいけないことですが、その時に感じたことは、厚木看護他いろいろな専門学校から就職してきて、その看護学校は、本当に自由なことを言っていますが、就職後にメンタルで崩れる人がほぼ居ませんでした。確かに学力は少し下なのかも知れませんが、教育担当という立場でしたが、「某学校はメンタルで崩れる子はいないよね、割と強いよ

ね」という話を上席としました。もしかしたら自由に好きな意見を言っている、常日頃カンファレンスでできているから、自分のことも表現して、自分のことも認めるといふ心の強さが育っていたのかもしれませんが。今、聞いているとそう感じました。

<A 委員>

みんな見ていて安心ですが、今後の発展性、創造性というところはどうでしょうか。厚看さんはまじめにやらないといけない、まじめさが前面に出てきてしまい、思いを伝えることに躊躇してしまうのではないのでしょうか。

<D 委員>

しっかりしているので学習もちゃんとできているし、普通に成長していく分にはとてもいいと思います。ただし、一時メンタルが崩れた時のフォローが大変だと感じます。崩れやすい、現場での配慮も必要です。

<B 委員>

数年前にある実習クールの11日間、カンファレンスでどんな意見をあげたのか、を集計しました。結果は、ほとんどが正解探して、教員がOKするか、しないか、が透けて見えてくる体がありました。これは、教員の指導力にあるな、というのがありましたので、その辺を議論しました。学生のカンファレンスをどうやって本当に意義あるものにしていくのか、を考えたときに「教員の議論する力」という意見が出ました。教員が会議で活発に議論を取り交わせるかといえば、意見を言える人と言えない人います。今、お話を聞いて、学生の背景ももちろんですが、本当に意見を取り交わすことのあり様、指導、発信できる環境、日々学内で、臨地に行く前の学内の中で、「何を話してもいい」といった議論ができる下地作りを教員と学生の両方で、同時に考えていかないと、中々立ちいかないです。今話を聞いていますと、カンファレンスを活発なものにするには、学校の中で、そうした対策を講じていく必要があると感じました。

<副委員長>

厚看には代々受け継がれている教育風土があり、教員もここの卒業生が多く、みんな臨床から厚看へ帰ってきたいという思いがあり、そこが厚看の良さです。そして自分達が受けた教育が、自分達が経験してきたカンファレンスや議論が、そのまま伝統的に受け継がれていく中で、どこでこれを打破するのかという機会、きっかけですが、今回の卒業時に期待する能力とか教育目標という議論において、教員達が精神や体に染み込ませて、この方略を考えていかないと、結局この場で具体的に恰好良くしても、何にも変わらなかったら、意味が無いと思います。実現する能力というところが、とても大事だと思います。

<D 委員>

昔は、自己表現をする場が社会の中でも、学生間でもあったので、カンファレンスがそういう状況でも、大丈夫だったと思います。先ほど言われたように、自分が発言しなくても、大人の中でコミュニケーションが成立して、あまり自己表現しなくても、進んでしまう、そう今の若者は育っているので、社会にポンと出たときに、きちんとしてはいるけれども、中々表現ができない、ってなってきたのかもしれませんが。

<E 委員>

高校のときに一定の枠からはみ出ると、仲間外れにされるので、「みんなと同じ」って風潮が有るではないですか。そこで育ってきているから、一挙に何でも自分のことを言うのは、それは無理だと思います。まず学校の中で人と違う意見を言ってもいいんだよってことを身につけさせないと急には難しいと思います。

<委員長>

小中高でも教育方法を変えなくては、と動いてはいるようです。発言力、表現力という点でいろいろとご意見をいただきましたので、私たちがどういう風に表現をする

のか、検討しながら考えていきたいと思います。あとは自由度ですが、その辺りも議論させながら、「期待する能力」というところにどう落とし込んでいくか、検討していただけたらと思います。学生たちは「厚看魂」って好きなのですよ。どういうのが「厚看魂」ですかって、聞いたら、「礼儀」、「挨拶」、「感謝」、「情熱」という言葉が返ってきました。学生たちは、そんな風に考えていて、それもとてとても大事なんですけど、加えていけないといけない要素もあるのかな、と貴重なご意見で感じさせられたところです。まだ少しお時間がございますが。

<B 委員>

もっとカリキュラムの点とかでお気づきのことがございましたら、本校に期待するところ、要望等ございましたら、ぜひお願いします。

<D 委員>

基本的に私は、厚看の学生はきちんとしていて、真面目ですし、よく勉強もされています。つらい時期は絶対に有るのですけど、同期で何とか乗り越えというところでは、協力し合うところもすごくあり、頑張っています。そういう精神は、すてきです。困っている人がいるとちゃんと声をかけて、一緒に食事に行く等すごく関係性は良いと感じています。

<E 委員>

1年目に言えないのは厚看だけではありません。2年目・3年目になってくると、1年目のときに言えなくても、結構チームとかにいろんなことを発言して頑張っていますよ。意見も言えるようになってきます。

<委員長>

卒業してから感じることもあります、在学中に感じなくても、教育ってそういうものだろうと感じています。すぐに成果が出るものと、後々に出てくるものと、全てを求めてはいけないと思っています。本日いろいろとフィードバックできる機会となり、良かったと、今思っています。ほか特に何も無ければ、本日は、本当に貴重なご意見をありがとうございました。それでは、審議の方は終了といたします。貴重なお時間をありがとうございました。

以上